

湘南の由来とエリアを探る
その 13

湘南発祥の地/大磯 - 3

— 嶋立庵・大淀三千風 —

和田精二

13-1 はじめに

湘南発祥の地について西行と崇雪の歴史的な関りを述べて来ましたが、最後は大淀三千風です。崇雪の没後、荒廃した庵の再興、西行 500 年忌開催、円位堂建立と西行像安置、嶋立沢の石碑建立など、嶋立沢興隆に注力した大淀三千風の存在があってこそ、崇雪による「湘南」の標石が現存し、大磯を「湘南発祥の地」として標榜出来る礎となった、とも言えます。



図 1 大淀三千風・2 種類の肖像画

文学史では、一般に「仙台大矢数」(後述)の三千風として、数行で片付けられることが多いようですが、湘南発祥の地という視点から大淀三千風はもっと知られてよい人物です。そこで今回は、嶋立沢・嶋立庵を今に伝える環境面の礎をつくった、俳人にして仏道者、嶋立庵第 1 世 大淀三千風について調べてみました。

13-2 挫折が起こした西行プロジェクト

伊勢の国飯野郡射和村(松坂市射和町)の商家に生まれた三千風(本姓三井氏、名は友翰)は、近世俳諧史上、中央俳壇に属さず特異な地歩を占めた地方俳人と位置づけられています。31 歳のときに移り住んだ松島や仙台で中央俳諧を狙いながら 15 年の俳諧生活を送りました。

そうした中で、談林派俳諧を中核として牽引していた井原西鶴が矢数俳諧(1 昼夜の独吟数を競う当時流行した俳諧コンペ)で 1,600 句の独吟を達成したという報せを受けた三千風の闘争心に火がつきます。時機到来と捉えた三千風は仙台で開いた大矢数興行で 3,000 句独吟を達成し、一挙に中央俳壇で有名な存在となります。西鶴からもらった跋文(3000 独吟記念集のあとがき)の中で激賞されたり、独吟歌仙を与えられています。(この時から三千風を名乗っています)。

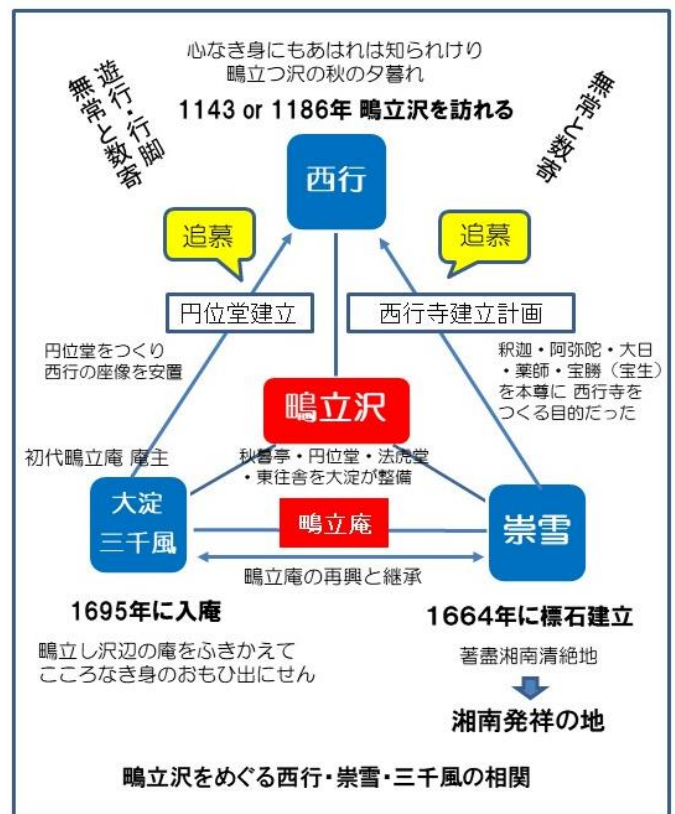


図 2 嶋立沢をめぐる西行・崇雪・三千風の相関図(改訂版)

しかし、この跋文も西鶴によって中央俳壇の争いとうまく利用されたに過ぎないことに三千風は気づいていたようです。西鶴は 1 年後に 4,000 句独吟を達成、三千風の記録を容易に乗り越えて行きます。それ以降も三千風と西鶴は数回の出会いを繰り返しますが、三千風から積極的に近づいた様子はなく、三千風の中で屈折した心理が蓄積していったと推定されます。

さて、3000 句独吟の記録が泡と消えた三千風は、①矢数俳諧の記録を更新して中央俳壇に躍り出る、②全国を行脚して紀行集を上梓する、という目標をたて、8年におよぶ行脚の旅に出ます。②については、7年間の全国行脚の記録と俳句・俳文を集めた「日本行脚文集」7巻を発行することで目標の半ばを達成しています。因みに、「日本行脚文集」は、東北・北陸・東海・山陽・山陰・九州・四国と全国に及んでおり、芭蕉の松島への旅や「奥の細道」の旅のきっかけともなりました。三千風と会うべく芭蕉が仙台を訪れたとき、三千風はすでに全国行脚に出かけた後だったといえます。



図3 三千風と関わりのあった松尾芭蕉（左）と井原西鶴（右）

紀行集上梓達成後も、①の目標を達成すべく、地方の句会を巡りながら力を蓄える日々を送りますが、そこへ西鶴の一昼夜23,000句独吟という信じられない知らせが入ります。この報せは、中央俳諧へ進もうとした三千風の前途を完全に閉ざしたばかりでなく、矢数俳諧自身の流行を終焉させるほどの破壊力がありました。

三千風はとてつもない挫折感に襲われますが、そこは転んでもただでは起きない不屈の三千風です。苦渋の中で発想した起死回生策が、西行伝説を有する鳴立沢を庵を中心に整備し、自らをその事業の中心に位置づける、いわば「西行プロジェクト」とも呼ぶべきものでした。沈降する意識の中で、歌人が思慕する西行と西行が歌に詠んだ鳴立沢を合体させ、鳴立沢を西行イメージに塗り込めていくコンセプトの立案と事業の推進。ここに「西行プロジェクト」の実践者として大淀三千風が蘇ることになります。

13-3 僧形で旅立った三千風

20歳前後から俳諧への思いを募らせていた三千風でしたが、両親を失い一家の働き手となっては願い叶わず、毎年出かける京・大坂への商用旅のたびに中央俳諧の情報を入手するのが精一杯でした。ところが、三井家の家業が安定した31歳のときに俳諧世界に飛び込めるチャンスが到来します。

長年の望みであった行脚への思いを実現し、松島を目指したのは、三井家の出店が出羽（山形・秋田）にあったことや中央俳壇における談林派の興隆を見るにつけ、矢数俳諧こそ地方にあって俳名を高める格好の目標であり、松島がその好適地と考えたようです。ここで注目されるのが、31歳の三千風が旅立ちに際して、頭をそり上げ法衣をまとった僧形に変身していることです。図1の2枚の肖像画からその雰囲気が見えます。僧形であることと鳴立沢における「西行プロジェクト」がどこかで繋がって来るものと思えます。

13-4 西行と重なっていく三千風



図4 湘南西行ファンクラブ

鎌倉時代以降、仏の道というよりも、世をはかなむ生きざまを美意識として高めようとした人々、例えば歌枕をめぐる諸国を遍歴した能因法師や、民衆のあいだに踊り念仏を広めた一遍上人、江戸時代になると松尾芭蕉などが出て来ますが、彼らのイメージの原点にあったのは、遊行の先達、西行でした。

三千風にとって31歳のスタートは、西鶴が句会判者に昇格したのが21歳、芭蕉が一門を形成したのが33歳という現実を考えれば、致命的なことと思われました。伊勢を出て遠く松島を目指す時、俳諧世界で失敗した時の担保を考えねばなりません。そこで、憧れであった行脚経験をもとにした紀行文作

家を目指す思いと、天分としての人を惹きつける説教能力の高さを活用しての仏道的説教者を目指す思いが心の中で交錯していったように思えます。

俳人、紀行文作家、説教者への挑戦に思いを馳せるとき、どこがほころんでも、他の能力で担保していけるという計算が三千風の中にあっただように思えます。三千風は、人を惹きつける話術に長け、文章は軽妙洒脱、俳諧も当時の軽口俳諧傾向が自分に合致していることをよく自覚していました。

こうした三千風に対し、大矢数興行は売名的行為だ！大矢数を看板に旅をした！「松島眺望集」掲載俳人を手掛かりに全国行脚をした！等々、三千風の下心や打算性を指摘する声も高かったようですが、見方を変えるとバランス感覚に富んだマルチタレントな能力が垣間見えて来るのも事実です。



図5 円位堂と安置されている等身大の西行座像

一方で、宗教面から見ると、「忍辱」をモットーに「呑空」を行じる「呑空法師」としての厳しい生き方を自らに課していた三千風を評価する指摘もあります。三千風は、死を賭して行う行脚について、「忍」こそが万徳の根源であり、それを行えば相対を超えた絶対の世界に入り得る、という信念と覚悟を有していました。三千風の中で、俳人と説教者は矛盾なく一致していたようで、そういう三千風が西行と自身を重ねていた可能性は大きいように思えます。重ねるところか、西行らしくふるまうことで、「今西行」と言われていたという楽しい話は後述しますが、俗物性と超脱性が同居した三千風という人物の面白さが伝わってきます。

13-5 三千風は本気で西行を追慕したのか？

国文学者の岡本勝氏（1938-2007）は、行脚時代の三千風に、鳴立庵再興のイメージが少しも無かったことを、彼の俳諧

や紀行文などから分析しています。行脚時代の総決算である『日本行脚文集』には西行に関する記述が15か所ほどあり、西行歌のゆかりの場所で、西行もしくは西行歌を思い起して懐かしんでいます、いずれも燃えるような西行追慕の念というにはほど遠いというのです。（以下要約）

『行脚時代に鳴立沢辺りを通し、鳴立沢について触れているが、後年鳴立庵再興で示したような熱狂的とも言い得る態度は窺うべくもない。また、鳴立沢辺りを通じた際の風景よりも西行松で知られた西行谷の風景の方が優っていると述べているのは大きな矛盾である。結論として、三千風における西行追慕の念は、必然的に三千風の内面から起こってきたものではなく、挫折の中で次なる目標を追いかけるときに発想したに過ぎない。行脚時代の西行に対する追慕の念を観察すると、行脚時代には鳴立庵時代ほど強くないことが判定されるため、鳴立庵再興は当時全く予期していなかった可能性が強い。



図6 東海道 53 次・大磯・鳴立沢/鳴立庵・広重画

俳人から説教者への変貌は、最初のそれほど顕著ではないが、徐々に俳人という立場から仏道者へと傾斜の度を強めていっている。しかし、それは三千風が積極的な意思でした転向ではなかった。』 「大淀三千風研究」岡本勝

鳴立庵経営に於いて、三千風が俳人よりも説教者への傾斜の度を強めたとあります。三千風が「西行プロジェクト」を始動させたとき、彼の中では俳諧への自信が崩壊していたため、説教者として生きる気持ちが勝って来たように思えます。ここで、そういう状況に追い込んだ原因が西鶴にあったと推定してみることができそうです。最初の挫折では、中央俳壇に躍り出ることと全国行脚による紀行集の上梓を打開目標に掲げましたが、2度目の打開目標は、「西行プロジェクト」を立上げることであり、自分の中での仏教的比重を高めることで、内なるバランスを整えることだったのです。そこには、西行という「かた

ち」を借りて「西行プロジェクト」をおこし、自己のバランスをとっていこうとする三千風の意思の営みが見えます。極言すれば、西鶴によって屈折した心理を超越するために西行を利用したと言えるかも知れません。

13-6 “今西行”と呼ばれた三千風

ここで興味深いのは、三千風の僧形には西行を彷彿させるものがあつたようで、行脚時代以降に訪れる先々で地方の俳人から“今西行”とみなされ、呼ばれるようになっていった事実です。“今西行”と言われると、自らも西行追慕の念が強かったことに加えて、根が陽気で無邪気だったことも手伝い“今西行”呼称を快く受け止め、意識して西行めかしく振舞うことで、心身ともに西行へ近づいていったのです。即ち、最初は普通に追慕し、打算の産物として西行を利用し、剃髪姿に法衣をまとい、西行らしく振舞ううちに“今西行”と呼称されると、自分の中で西行が大きく増大していき、ついでには追慕の念まで肥大してしまった、その行きついた先が「西行プロジェクト」であつたとさえ言えそうです。

13-7 こんなに頑張った西行プロジェクト

三千風が嶋立庵に入ったのは、元禄8年、57歳の年でしたから、現代におき換えれば、定年間近の人が新規事業を起こしたことになります。その「嶋立沢プロジェクト」の実態を年譜のかたちで整理してみると三千風の頑張り様が窺えます。



図7 嶋立庵に増築した俳諧道場の室内

■三千風の「嶋立沢プロジェクト」プロデュースの成果

○元禄8年(57歳)嶋立庵入庵。

○元禄9年:「法語三人物語」上梓。

この頃、西行像を求め京に遊び、文覚作と伝わる西行の木造を得る。

○元禄10年:西行500年忌に当たるとし、謡曲「嶋立沢」を自作梓行。

円位堂(西行堂)を建立、伝文覚作西行像を安置。「倭漢田島集」板行を計画。

○元禄11~13年春:2度目の九州行脚を企てる。

○元禄13年:「嶋立沢縁起」を刊行。

富山氏の寄進で「嶋立沢石碑」を建立。

○元禄14年:嶋立沢に法虎堂を建立。

三千風の人生の総決算書「倭漢田島集」を刊行。

○元禄16~17年:3度目の九州行脚。

13-8 三千風のスポンサーは誰だった?

ここで気になるのが、上記年譜に記した事業の資金をどこから獲得したかという疑問です。年譜にあるように、「嶋立沢石碑」は豪商富山氏の寄進によりますが、それ以外については不明です。富山氏は三千風と郷里を同一にしていますから、三千風が富山氏に接近することは容易に想像できますし、石碑以外にも寄進があつたものと推定されます。参考までに富山氏について記しておきます。

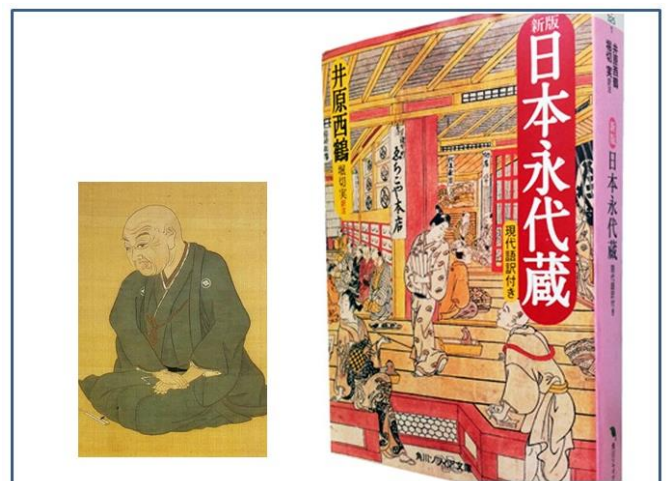


図8 嶋立沢寄進者富山氏が登場する「日本永代蔵」と作者の西鶴

富山氏は三千風と同じ郷里の伊勢の国射和村から出た豪商で、祖先は河内国を領し、足利義政に仕えた富山義就(応仁の乱の中心人物のひとり)です。その次子義持が富山氏の始祖となって射和村に土着、4代栄重は小田原に移り呉服屋を開業し

ています。その後江戸本町1丁目に進出し、屋号を大黒屋と称して呉服屋を開業、さらに、京都、藤岡、大阪等に支店を開業したり、幕府の公金為替を扱うなど、発展していきます。西鶴の「日本永代蔵」巻2の3「才覚を笠に着大黒」における大黒屋がこの富山氏と言われています。大黒屋のような人物を三千風が放っておく方が不自然です。崇雪没後廃屋となっていた庵（崇雪没後の庵の経緯は不明で嶋立庵命名も崇雪説と三千風説がありますが確認できていません）の再興費用も西行像の購入費用、円位堂建立費用も大黒屋の寄進によるものと推定されますが、確認できていません。

13-9 さいごに



図9 大磯にある明治24年創業和菓子本舗「新杵」と西行まんじゅう

三千風は31歳で望み叶って旅で出た後も妻帯せず、郷里に戻ったのが鬼籍に入る3年前の67歳ですから、生涯を漂泊の旅の中に送った訳です。俳人として目標を達成できなかった三千風ですが、実務家として、思い立ったことを計画的に進め、その結果を出してから次の段階に進むプロセスを実践、その成果物を現在に遺しています。仙台時代の「眺望集」、行脚時代の「行脚文集」、嶋立庵時代の「田島集」という具合にそれぞれの時代にそれぞれの決算書を提出しています。

それに加えて、「西行プロジェクト」に於いて、スポンサーを確保し、庵を改修し、円位堂等や石碑の建立に努めたことにプロデューサーとしての三千風の能力を物語っています。「西行プロジェクト」を達成したことが、日本3代俳諧道場のひとつとして継承され（1765増築）、現在に至っています。そればかりでなく、崇雪建立の「湘南」の文字が刻まれた標石を今日に残した点でも大きな文化遺産を遺してくれたことになり

ます。嶋立し沢辺の庵をふきかえて ころなき身のおもひでにせん
（嶋立沢 大淀三千風 句碑）



■引用図表

図1：大淀三千風肖像画

http://www.norinagakinenkan.com/whats/kizou_nihonangya.html

図3：松尾芭蕉と井原西鶴の肖像画

<http://toshidensetsuu.com/world/239/>
<https://matome.naver.jp/odai/2142815600246783101/2142841462378527403>

図6：東海道53次・広重画・嶋立庵・嶋立庵

[https://ja.wikipedia.org/wiki/東海道五十三次_\(絵\)#/media/File:Oiso_Reisho_Tokaido.jpg](https://ja.wikipedia.org/wiki/東海道五十三次_(絵)#/media/File:Oiso_Reisho_Tokaido.jpg)

図8：日本永代蔵・井原西鶴

<https://lohaco.jp/product/LO1136923/>

■引用文献、参考文献

大淀三千風研究 岡本勝 桜楓社 1971

大淀三千風論 山本唯一 大谷学報

<http://echo-lab.ddo.jp/Libraries/大谷学報/大谷学報%20第50巻%20第1号/大谷学報%20第50巻%20第1号%20001本%20唯一「大淀三千風論」.pdf>

にほんとニッポン 松岡正剛 工作舎 2014

嶋立庵リーフレット 大磯町観光協会・大磯町 2005